英語モジュールにみるカナダ英語の特徴

矢　頭　典　枝

Features of Canadian English as Described in the English Modules

Yazu Norie

This article explains the features of Canadian English depicted in the Canadian version of the KANDA×TUFS English Modules (Dialog). First I explain the features of the pronunciation of Canadian English other than Canadian Raising, mainly comparing them with those of American English. Then I explain the present features of Canadian vocabulary, focusing on "Canadianisms," and Canadian spelling which is strongly influenced by the British style. Along with these explanations, I discuss the changes which Canadian English has experienced since the 19th century and present a brief history of the formation of Canadian English. I also describe the cultural and social aspects depicted in the Canadian version. I conclude by focusing on the analysis of the use of the well-known Canadian discourse marker and national identity icon, "eh," by presenting an anecdote about the filming of the Canadian version, in which some of the Canadian actors inserted "eh"s that were not in the original scripts.

キーワード：　カナダ英語、カナダの二重の基準、カナディアニズム、"eh"

1.　はじめに

これまでに公開された 5 つの英語モジュールのなかで最も新しい「カナダ英語モジュール」が 2014 年 10 月に公開されたとき、ユーザーたちから「アメリカ英語と同じに聞こえる」という趣旨のコメントを多く得た。本特集の斎藤と新城が指摘するように、カナダ英語とアメリカ英語は、発音の面ではほとんど同じであり、car や cart といった語で、母音のあとの /r/ を発音する R 音性的な（rhotic あるいは r-full）英語である。これに対し、

イギリス英語の現在の規範とされるエスチュアリー英語、オーストラリア英語、ニュージーランド英語は、非 R 音性的な（non-rhotic あるいは r-less）英語である。

本稿では、カナダ英語の発音、語彙、綴り字の特徴について、カナダ英語会話モジュールに出てくる言語項目を例に挙げて解説し、カナダ英語形成の歴史的側面についても触れる。また、カナダの文化と社会の諸相が本モジュールでどのように表されているか、という点についても解説する。最後に、カナダ英語のステレオタイプとして知られる談話標識の “eh” の機能について分析し、それが本モジュールのなかでどのように記述されているか、また、カナダ人のアイデンティティとどのように関わっているか、という点について論じる。

2.　発音

アメリカ英語とカナダ英語の音体系はほとんど同じであるため、アメリカ英語会話モジュールで記述されている発音説明はカナダ英語版にも当てはまる。他方で、カナダ英語に特有の発音として「カナディアン・レイジング（Canadian Raising）」が挙げられるが、この点については新城稿の表 1 を参照されたい。ここでは、カナダ英語モジュールにみられる、カナディアン・レイジング以外のカナダ英語特有の発音について指摘することとする。

カナダ英語は日本人にとって聞きやすい、というコメントは良く聞かれるが、その一因として、カナダ英語では日本語と同じ音色の母音が聞かれることがある、という点が考えられる。

まず、日本人にとってアメリカ英語と比べて、カナダ英語の方が聞きやすい発音として sorry、tomorrow、borrow の下線部の母音の発音が挙げられる。アメリカ音では、舌の位置が下がり、非円唇母音の /ɑ:/ になる傾向がある。それは日本語の母音の「オ」と「ア」の中間くらいの母音に聞こえ、日本人の耳には馴染みがない母音である。カナダ音では中程度の円唇の中高母音 /o:/ になる傾向がある（Trudgill & Hannah, 2008:53）。アメリカ人がカナダ音の sorry を聞いたとき、違和感を覚えることは良く指摘される（Boberg 2010:133）。しかし、このカナダ音は、日本語の「オ」の母音と

ほぼ同じであるため、日本人には馴染みがある母音に聞こえ、日本人にとって聞きやすく、発音もしやすい[1)]（矢頭 2014:47）。カナダ英語会話モジュールに出てくるこれらの語に関する発音説明の例を表 1 に示す。

表 1. sorry, borrow, tomorrow に関する発音説明の例

sorry	sOrry の /r/ の前の母音は、カナダ英語では円唇化し、「ソーリー」のように聞こえる。アメリカ英語では「サーリー」のように聞こえることが多い。［23. 謝る： CA］
borrow	bOrrow の /r/ の前の母音は、カナダ英語では円唇化し、「ボーロウ」のように聞こえる傾向がある。アメリカ英語では「バーロウ」のように聞こえる傾向がある。［11. 依頼する： CA］
tomorrow	tomOrrow の /r/ の前の母音は、カナダ英語では円唇化し、「トゥモーロウ」のように聞こえることが多い。アメリカ英語では「トゥマーロウ」のように聞こえることが多い。［20. 人を紹介する： CA］

また、after, last, class などの語の /æ/ は、アメリカ音では舌の位置が日本語の「エ」と「ア」の中間で長めに発音され、さらに二重母音化することもあるが、カナダ音では舌の位置が後ろ寄りになり、日本語の「ア」と同じ響きをもつ。この点に関する発音説明の例を表 2 に示す。

表 2. /æ/ のカナダ音に関する発音説明の例

after	“After” はアメリカ英語では /æ/ だが、カナダ英語では日本語の「ア」と同じ音色で、「アフタ」のように発音されている。［26. 予定を述べる： CA］
last	“lAst” は、アメリカ英語では /æ/ だが、カナダ英語では日本語の「ア」と同じ音色で、「ラーストゥ」のように発音されている。［4. 経験についてたずねる： CA］
class	“clAss” は、アメリカ英語では /æ/ だが、カナダ英語では日本語の「ア」と同じ音色で、「クラース」のように発音されている。［4. 経験についてたずねる： CA］

アメリカ英語とイギリス英語で発音が異なる場合、カナダ音がイギリス音と同じになる稀なケースとして、いわゆる「外来語の a（foreign（a））」

がある。これは、外国語からの借用語で、第一アクセントがくる音節に a が含まれる語の発音を指し、語にもよるが、アメリカ英語では /ɑ:/、カナダ英語とイギリス語では /æ/ と発音される。ボバーグの調査によると、カナダ音とアメリカ音で最も差があるのは、順に pasta、lava、plaza、Slavic、drama であり、他方で lasagna や mafia などの語はカナダ人でもアメリカ音で発音する人が多い（Boberg 2010:140）。表 3 はカナダ英語会話モジュールに出てくる pasta の説明である。

表 3.　外来語の a に関する発音説明

pasta	“pAsta” はアメリカ英語では /ɑ:/、カナダ英語とイギリス語では /æ/ と発音される。［31. 好きなものについて述べる： CA］

なお、カナダ英語にも地域的な変種が存在するが、国外の英語変種と比較されるのは「標準カナダ英語（Standard Canadian English）」である。その標準発音（standard accent）はチェンバーズ（J. K. Chambers）によって、「二世代以上にわたって都市部に在住し、中流層のアングロフォン（英語を母語とする）であり続けたカナダ人によって話される都市部の中流層の人々の発音」（Chambers 1998:252）と定義される。カナダ英語とアメリカ英語の発音がほぼ同じであるのは、1776–1793 年の間、アメリカ独立革命を逃れてカナダ（当時は英領北アメリカ植民地）に大量流入した政治亡命集団、いわゆる王党派の英語がカナダ英語の基盤になっているからである。このとき、新しく誕生したアメリカ合衆国の中北部から北上した王党派の数は約 5 万人ともいわれ、英領北アメリカ植民地の多数派を形成し、英語系カナダの基盤を作った。アメリカ合衆国では、同じ中北部から西部開拓がはじまり、現在のアメリカ英語の標準発音とされる一般米語の原型が広範囲に広まっていった。つまり、カナダ英語とアメリカ英語は同じ起源をもつのである。その後、英領北アメリカ植民地では、1816–1857 年をピークに植民地政府の斡旋によりイギリス本国から大量の移民が到来し、その数は最終的に先住者である王党派とその子孫の数を上回ったが、イギリス移民の多くが話していたと思われる非 R 音性的な英語が、先住者たち

のR音性的な英語よりも優勢になることはなかった。こうした方言接触による言語形成について、チェンバーズは次のように説明している。

> 子供の話し方を決定づけるのは、世の常として、子供の同世代の友達の話し方である。新参者として、イギリスからやってきた移民たちは、新天地において確立していた無数のパターンに適応するしかなかった。その適応の一つは、自分たちの子供たちが、自分たちの英語変種ではなく、共生する王党派たちの英語変種を習得しながら成長する様子を傍観することであった。(Chambers 2004:228)

イギリスからの移民たち自身は、新大陸に移住しても生涯その話し方を変えなかったであろうが、その子供たちは地元の有力勢力が話す変種を習得し、その結果、発音の面では、地元の(アメリカ的な)英語変種が多数派の変種として支配的になったのである。

しかし、19世紀半ばより、植民地政府はイギリス本国の学校教員を大量にカナダに送り込み、植民地で使われていた北アメリカ的な英語の払拭に努めた。学校では、子供たちは、イギリス式の発音、語彙、綴り字を学ばされ、発音の面では、イギリス式の発音の方が「正しい」とする教育が行われた――schedule の最初の子音は /ʃ/、tomato や rather の下線の母音は /ɑ:/ と指導された。その結果、カナダ英語には語によっては両方の形が残ることになった。これは「カナダの二重の基準(Canadian double standard)」と呼ばれ、チェンバーズによってカナダ英語の大きな特徴とされている(Chambers 2004:230–233)。発音の面では、結果として、エリート層はイギリス的な言語的・文化的特徴に価値を見出し、イギリス英語の容認発音を真似たが、一般のカナダ人は北アメリカ的な発音を変えることはなかった。カナダでは、イギリス的発音の多くは20世紀後半より消失してきているが、現在でも例えば either の下線の母音がアメリカで優勢な /i:/ とイギリスで優勢な /aɪ/、アルファベットの最後の文字 “Z” の発音としてアメリカ式の /zi:/ とイギリス式の /zed/ の両方が使われている。後者に関しては、チェンバーズの調査で、カナダ人の子供たちはアメリカの幼児番組

などの影響を受けて、アメリカ人のように［zi:］と発音するが、大人になってからカナダの伝統的な発音である［zed］に変える傾向がみられる、という結果が出ている（Chambers & Trudgill 2002:151–2）。

3.　語彙

生活用語（飲食物、衣服、身の回り品、住関係、乗り物関係、交通関係、ビジネスなど）については、カナダ英語のほとんどの語彙はアメリカ英語と同じである。例えば、「エレベーター」はアメリカ英語とカナダ英語では elevator であるが、イギリス英語では lift という。「おむつ」と「懐中電灯」はアメリカ英語とカナダ英語ではそれぞれ diaper と flashlight であるが、イギリス英語ではそれぞれ nappy と torch という。また、カナダ英語では自動車関係の用語はすべてアメリカ英語であり、例えば「フロントガラス」や「ボンネット」はそれぞれ windshield と hood が使われ、イギリス英語の windscreen と bonnet は使われない。表 4 はカナダ英語会話モジュールにでてくる生活用語の説明例である。

表 4.　生活用語の語彙説明の例

garbage	「ゴミ」はカナダ英語とアメリカ英語では “garbage”、イギリス英語では “rubbish” がよく使われる。［38. しないでくれと言う： CA］
gas	アメリカ英語とカナダ英語では「ガソリン」は “gas” あるいは “gasoline”。イギリス英語と豪・NZ 英語では “petrol”。［29. 数字についてたずねる： CA］
fries	「フライドポテト」はアメリカ英語とカナダ英語では “french fries” あるいは “fries”。イギリス英語では “chips” という。［27. 程度についてたずねる： CA］
mom	“mom” は “mother” を短縮したくだけた言い方。「お母さん」。カナダ英語とアメリカ英語では “mom”、イギリス英語と豪英語では “mum” が一般的。［34. 状況についてたずねる： CA］
serviettes	“serviettes” は “paper napkins” の意味。「ナプキン」。カナダでは serviette を使う人が多いが、若年層は paper napkin を使う傾向がある。［2. 注意を引く： CA］

（豪英語＝オーストラリア英語、NZ 英語＝ニュージーランド英語）

このように、カナダ英語では生活用語全般において、アメリカ英語と同じ語彙が圧倒的に優勢であるが、語によってはイギリス英語の語を使う人もいる。つまり、カナダ英語の語彙においても、「カナダの二重の基準」がみられる、といえる。例えば、母親をカジュアルに呼ぶときの「お母さん」は、カナダ英語では、表 4 に示すように、アメリカ英語の Mom が一般的であるが、イギリス英語の Mum も聞くことがある。また、「尻」はアメリカ英語の butt が優勢であるが、イギリス英語の bum も聞くことがある。

また、数は少ないが、イギリス英語と同じ語が優勢な生活用語もある。最も引き合いに出される例を挙げれば、「蛇口」はカナダ英語ではイギリス英語の tap が使われ、アメリカ英語の faucet が使われることはほとんどない。「旅行鞄」と「(レストランでの) お勘定」は、アメリカ英語で一般的な baggage と check よりもイギリス英語の luggage と bill が優勢である。

アメリカ英語とイギリス英語の語の両方がある場合、若年層を中心に、アメリカ英語の方が優勢になっていく傾向、つまり「語彙のアメリカ化」が見られる。例えば、「輪ゴム」と「消しゴム」は、かつてはイギリス英語の elastic と rubber が優勢であったが、現在ではアメリカ英語の rubber band と eraser が使われるようになっている。表 4 の serviettes (「(食事用) ナプキン」) についても同じことがいえる。なお、以上で触れたカナダ英語の語の使用頻度に関しては、ボバーグによればカナダ国内で地域差がみられる (Boberg 2010:167–188) が、本稿ではそこまで立ち入らない。

なお、政治制度に関する語については、カナダはイギリスの制度に倣っているため、イギリス英語の語彙が使用される。例えば、「議会」はカナダではイギリスと同じ Parliament、アメリカ英語では Congress である。

カナダ特有の語も存在する。1998 年に創刊された *Oxford Canadian Dictionary* には約 2,000 語をカナダ特有の「カナディアニズム (Canadianisms)」として記載している。その多くはカナダ国内に広く生息、分布する動植物 (caribou「カリブー」や moose「ムース」)、あるいはカナダ発祥のもの (toboggan「ソリ」) であり、先住民起源の語が多い。カナダにしかないものとして、カナダ硬貨の愛称が挙げられる。北アメリカに生息する鳥 loon (「アビ」) の絵がモチーフになっているカナダ 1 ドル硬貨は loonie、それを

もじって 2 ドル硬貨は toonie（two と loonie を合体させた語）と呼ばれ、カナディアニズムの代表例である。カナダ英語会話モジュールに出てくるカナダ特有の語の語彙説明の例を表 5 に示す。

表 5.　カナディアニズム（カナダ特有の語）の語彙説明の例

toonie	“toonie”（tooney とも綴る）はカナダの 2 ドル硬貨のこと。1 ドル硬貨が、loon（アビ：北米に生息する鳥、水に潜って魚をとる）がモチーフになって “loonie”（looney とも綴る）という通称がついている。2 ドルは two と loonie をもじって toonie という。［10. 提案する：CA］
toque	“toque” は “long knitted hat” の意味で、カナダ特有の語。“tuque” とも綴る。ケベック州のフランス系カナダ人が元々使っていたフランス語の語。［10. 提案する：CA］
toboggan	“toboggan” はカナダのソリ。伝統的なものは木製で、手すりとなる先端がカーブしている。［11. 依頼する：CA］
hydro	“hydro” は electricity の意味。カナダでは電気のことを hydro という。カナダは水力発電が主流のため。［33. 順序について述べる：CA］
double-double	“double-double” は “a coffee with two creams and two sugars” の意味。「クリームと砂糖が二つずつ入ったコーヒー」カナダではポピュラーなコーヒーの飲み方。［25. 金額についてたずねる：CA］

他方で、ボバーグによる調査をもとに、他の英語圏に存在するもので、カナダでは異なる語が使われる代表例を頻度の高い順に表 6 に示す。最もカナディアニズムとしてカナダ人による使用頻度が高い語は「一年生」であり、カナダ人の 85% が “grade one” を使用し、アメリカとイギリスでは、それぞれ “first grade” と “first form” が優勢である。カナダ人が「トイレ」の意味に良く使う “washroom” はカナダ人の半分が使用するという結果が出ており、アメリカとイギリスでは、それぞれ “bathroom” や “lavatory” が優勢である。なお、表 6 はカナディアニズムの使用頻度を単純化した全国平均であり、ボバーグの調査によれば、カナディアニズムには地域差がかなりある。例えば「運動靴」を意味するカナディアニズムの “running shoes” の使用頻度は全国平均で 28% となっているが、オンタリオ州とケベック州では 60% 以上、という結果が出ている（Boberg 2010:179–180）。

表 6. カナディアニズム（他の英語圏では異なる語を使う例、頻度順）

和訳	カナダ英語	頻度（%）	アメリカ英語	イギリス英語
一年生	grade one	85%	first grade	first form
ワンルームマンション	bachelor apartment	62%	studio apartment	studio flat
ATM	bank machine	55%	ATM	cash dispenser
（屋根の）とい	eavestroughs	55%	gutters	gutters
トイレ	washroom	50%	bathroom, restroom	lavatory, loo
駐車場（モールなどの）	parkade	33%	parking garage	car park
運動靴	running shoes	28%	sneakers	trainers

出典：Boberg（2010:116）

また、伝統的なカナディアニズムとしてよく引き合いに出される chesterfield は、「ソファ」を指す語として使われてきたが、近年アメリカで使用される couch（あるいは sofa）にとってかわられ、近年では高齢者のみが使用する（Chambers & Trudgill, 2002:121–3）。他にも多くのカナディアニズムがアメリカ英語にとってかわられる傾向が近年見られる。

カナダ人がよく使う談話標識として知られる eh? もカナディアニズムに分類されるが、これについては後述する。

4. 綴り字

綴り字の面では、アメリカ式とイギリス式で綴り字が異なる場合、カナダ英語は多くの場合、イギリス式の綴り字を規範としている。例えば、カナダ英語ではイギリス式の colour、labour、centre、defence、travelling と綴り、アメリカ式の color、labor、center、defense、traveling は教えられていない。

しかし、アメリカ式の綴り字が規範とされる語もある。-ize/-ise で終わる動詞については、カナダ英語ではアメリカ式の -ize を規範とする[2)]。し

たがって、この部類に属する語の綴り字として、カナダ英語では realize、recognize、organize が一般的であり、イギリス式の realise、recognise、organise はみられない。

カナダ英語会話モジュールに出てくる綴り字の説明の例を表 7 に示す。

表 7.　カナダ英語の綴り字の説明の例

centre	カナダ英語では、イギリス英語と同様、centre と綴る。アメリカ英語では center。［25. 金額についてたずねる： CA］
favour	カナダ英語はイギリス英語と同様、favour と綴る。アメリカ英語では favor と綴る。［17. しなくともいいという： CA］
shovelling	“shovel” は「雪かきをする」という意味。進行形になった場合、カナダ英語では shovelling（イギリス式）と shoveling（アメリカ式）の両方の綴りがある。［19. 希望を述べる： CA］
licence	カナダ英語では licence はイギリス英語と同じ綴り。アメリカ英語では license。［33. 順序について述べる： CA］

現在、イギリス英語の要素が最も見られるのは綴り字の面であるといえる。先述したように、19 世紀半ばよりイギリス本国から送り込まれた学校教員により、カナダの子供たちはイギリス式の語彙、綴り字、発音を仕込まれたが、これらは、隣接する強大な隣国アメリカ合衆国からのメディアや出版物の流入、両国間の経済的な繋がり、そしてモノとヒトの行き来によるアメリカ英語の影響で薄まっていった。

綴り字に関しては、連邦結成後、1890 年にカナダ連邦政府がイギリス式の綴り字を政府の公式文書に採用することを規定する勅令を発布した（Pratt 1993:52）ものの、一般の国民の間では、つい最近の 1990 年代末まではカナダ英語の綴り字の規範は確立していなかった。従来、カナダの新聞各紙は、多くの場合、アメリカ式の綴り字を採用し、1990 年に初めて全国紙の *Globe and Mail* がイギリス式を「カナダの伝統的な綴り字」として採用することを発表した（Pratt 1993:50）。1967 年にカナダ英語の辞書として初めて出版された *Gage Canadian Dictionary* も、アメリカ式、イギリス式の順に綴り字を掲載し、先に掲載された方が優先されるという印象を読者

に与えていた。1970 年代から 1990 年代初めまでに “Canadian” と名が付く辞書は、最も出回っていた *Gage* を含め、6 冊出版されたが、color/colour など -or/-our で終わる語について、そのうち 3 冊がアメリカ式、3 冊がイギリス式の綴り字を先に掲載している。1990 年代に入って改訂された *Gage* は、イギリス式を先に掲載した。また、連邦政府が「カナダ英語の規範を模索するすべてのカナダ人のための貴重なツール」として 1985 年に刊行した *The Canadian Style: A guide to Writing and Editing* は、イギリス式とアメリカ式の両方を掲載し、「ここに記されている基準や勧告は、どちらかの形を排除するものとして理解されるべきではない」（Pratt 1993:52）と曖昧な態度を示していた。その後、1997 年に出版された *The Canadian Style* の改訂版は、改定された Gage がカナダ英語の綴り字の権威であるとし、二つの形が掲載されている場合、先に掲載された方を使用するように推奨している（Public Works and Government Services 1997:52）。これは、-our/-or で終わる語をはじめとする多くの場合、イギリス式である。

カナダ英語の綴り字の規範の確立に貢献しているのは、前述した 1998 年の *Canadian Oxford Dictionary*（*COD*）の刊行である。*COD* の刊行から現在までの 15 年間、メディアや学校教育において、*COD* の綴り字の規範が定着するようになった状況が観察される[3)]。とはいえ、現在でも、表 8 の “shovelling” の説明にあるように、カナダでは、語によってはイギリス式とアメリカ式の両方の綴り字を目にすることがある。つまり、綴り字にも「カナダの二重の基準」がある。

5. 文化と社会

英語会話モジュールでは、各変種固有の語彙と発音の違いを学ぶだけでなく、各国の文化や社会の諸相に触れることもできる。後半の 20 会話は、比較しやすいように、基本的に同じスクリプトを採用しており、部分的に各変種固有の語彙や表現、場面設定に変え、出演者はそれぞれの英語固有の発音で会話している。それゆえ、各英語変種の特徴が際立つ。

すでに公開されている 5 つの英語モジュールのなかで、同じ番号の動画

にみられる各英語変種固有の語と背景写真の例を表 8 に示す。動画 25 番では各国の大手商業施設、26 番では各国で人気のスポーツ、38 番では各国の典型的な雄大な景色を出している。

表 8.　後半 20 会話における各英語変種固有の語や設定の例

動画	社会文化	アメリカ英語	イギリス英語	豪英語	NZ 英語	カナダ英語
#25	商業施設	Central Plaza	Churchill Square	Myers	Kirkcaldie & Stains	Eaton Centre
#26	スポーツ	baseball	footie（サッカー）	footy（ラグビー）	ABs（ラグビー・チームの All Blacks）	hockey
#38	背景写真	セントラルパーク	ブリティッシュヒルズ[4]	タスマニア	テカポ湖	ルイーズ湖

表 9 が示すように、カナダ英語会話モジュールでは、カナダの地名やスポーツ、公共施設や機関、商業施設、祭日、食べ物などの固有名詞を数多く説明している。

表 9.　カナダ独自の文化と社会の説明の例

Air Canada Centre	Air Canada Centre はカナダの最大の屋内競技場。「トロント・メープルリーフス」（ホッケー・チーム）と「トロント・ラプターズ」（バスケット・ボールのチーム）の本拠地。［5. 手段についてたずねる：CA］
streetcar	“streetcar” は路面電車。トロントでは、トロント交通局（Toronto Transit Commission（TTC））が地下鉄、バス、路面電車、軽軌道鉄道を運営している。［5. 手段についてたずねる：CA］
hockey	hockey はカナダの国技。「ホッケー」。［26. 予定を述べる：CA］
Eaton Centre	Eaton Centre は、トロントの中心部にある大規模なショッピングセンター。（“Eaton’s” は、“The Bay” と並び、カナダ大手の百貨店チェーンであったが、1999 年に倒産。トロントのショッピングセンターにはその名称が残っている。）［25. 金額についてたずねる：CA］

Victoria Day	“Victoria Day” は 5 月末の月曜日（25 日の前）に設けられたカナダの国家的祭日。ヴィクトリア女王（1819–1901）の誕生日を記念する。カナダ人はこの日から夏のシーズンが始まると認識し、庭でバーベキューをしたり、田舎の別荘に行ったりし始める。［35. 条件をつける：CA］
Québec City	Québec City はフランス語圏ケベック州の州都。1608 年にフランス人が植民地化した北米最古の街。中世の街並みが残る観光地として有名。［19. 希望を述べる：CA］
poutine	“poutine”「プティーン」はカナダ・ケベック州発祥の食べ物。フライドポテトにグレイビー・ソースとチーズをかけたもの。［27. 程度についてたずねる：CA］

なお、背景写真には、オフィス、レストラン、キャンパスといった屋内の場面設定では、他の英語会話モジュールと同様に神田外語大学で撮影した写真を使ったが、屋外と家庭内という場面設定ではカナダで撮影した写真を使った。いくつかの屋外の写真には、トロントの CN タワー（動画 34.　状況についてたずねる）やカナディアン・ロッキーのルイーズ湖（動画 38.　しないでくれと言う）など、よく知られるカナダの観光名所の写真も使い、ユーザーが視覚的にもカナダの雰囲気を味わえるよう工夫した。

6.　“eh” とカナダ人のアイデンティティ

カナダ人に特徴的な話し方として「“eh” をよく言う」というコメントがカナダ内外で聞かれる。“eh” は、ニュージーランド英語版にも出てくる（“aye” と綴る）ことからも示唆されるように、他の英語変種でも使われることもある談話標識である。カナダで使われる “eh” には、10 の機能があると指摘されている（Gold & Tremblay（2006））。表 10 は、“eh” の 10 の機能とその例文とともに、アンケート調査に基づくその使用率を示している。回答者はトロント大学の 90 名の学部生であり、問いは「あなた自身は実際にこの機能の “eh” を使うか」というものであった。

表 10.　カナダで使われる “eh” の 10 の機能と自己申告による使用率

	機能	例文	使用率
1	意見を言う	Nice day, eh?	78%
2	感嘆する	What a game, eh?	73%
3	慣用的表現	Thanks, eh?	53%
4	咎める	You took the last piece, eh?	47%
5	命令する	Think about it, eh?	46%
6	繰り返しを求める	Eh? What did you say?	39%
7	軽蔑する	You’re a real snob, eh?	36%
8	事実を述べる	It goes over here, eh?	34%
9	質問する	What are they trying to do, eh?	26%
10	何かについて語る	This guy is up on the 27th floor, eh? then…	16%

出典：Gold & Tremblay（2006:252）より筆者作成

チェンバーズは、上記のうち、カナダ英語に特徴的な “eh”（Canadian-eh）は 2 と 10 であると指摘する（Chambers 2014:57–58）。前者の「感嘆する」の “eh” は表 10 の例文にあるように、感嘆文の最後に挿入される。その使用率は 73% と報告され、多くのカナダ人が使うことがうかがえる。後者の「何かについて語る」の “eh” は、いわゆる “narrative-eh”（語りの “eh”）で、話し手が何かについて語るとき、聞き手が自分の言っていることを理解しているのか、を確かめ、また、自分の話がまだ終わっていないことを示す談話標識であり、文中あるいは文末に挿入される。その使用率は 16% と低いが、アンケート調査は回答者の主観が入るため、実際の自然会話では使用率がもっと高いと推測される。実際、同じ調査で「語りの “eh”」を聞いたことがあるか、との問いに対し、66% が聞いたことがあると回答している（Gold & Tremblay 2006:251）。

“eh” は単なる談話標識ではなく、現在では、カナダ人のアイデンティティ・マーカーとして認識され、ステレオタイプ化している側面もある。オリジナルのスクリプト[5)]には、“eh” が二つの会話にのみ 1 回ずつ使われ

ていた。ところが、スタジオでの動画撮影時にカナダ人出演者たちがアメリカ英語版との違いを出すことを主張し、“eh” をアドリブで入れることになった。収録の際、結局 “eh” は、七つの会話のなかで合計 9 回使われた。ウェブページに掲載されている “eh” についての語彙説明をいくつか表 11 に示す。なお、広い層のユーザーが理解できるように「談話標識」という語を避け、「間投詞」という語を使って説明した。

表 11. “eh” の語彙説明の例

What a beautiful view, eh?	“eh?” はカナダ人がよく使う間投詞。ここでは、感嘆文の後に使われており、これは eh? の最もカナダ的な用法の一つである。「本当にそう思わないか？」といった意味。［38. しないでくれと言う： CA］
It’s been a long week, eh?	ここの間投詞 “eh” は、自分の意見を述べ、相手の同意を得る機能を果たす。付加疑問的な使い方。［6. 能力についてたずねる： CA］
Yes, but it’s been ages, eh, so I’m probably a bit rusty.	ここの “eh” は、「語りの eh」（narrative eh）と言われ、何かについて語る時の間投詞。“eh” の最もカナダ的用法の一つ。［6. 能力についてたずねる： CA］
Thanks, eh!	“eh” はカナダで良く使われる間投詞。Thanks, eh! は、カナダでは慣用句として使われることがある。［11. 依頼する： CA］
It’s about that time, eh?	“eh?” はカナダ人がよく使う間投詞。ここでは、付加疑問的に、自分の言ったことに相手の同意を求めている。「ですよね？」［26. 予定を述べる： CA］

カナダ英語会話モジュールではかなりの頻度で “eh” が登場するが、全てのカナダ人が “eh” を頻繁に使うわけではない。カナダ人の “eh” の使用に対する言語態度は様々であることに留意されたい。前述の調査では、“eh” の使用に対して 17% が肯定的、27% が否定的、56% が中立な態度を示す、という結果も得られた（Gold & Tremblay 2006:253–6）。“eh” がカナダ英語の特徴としてテレビ番組で脚光を浴び始めた 1980 年代初め、教養の低い人々が使うというイメージがあった[6]ことも関係して、現在でもその

使用を好まないカナダ人も少なからず存在する。実際、英語モジュールの撮影で、“eh” をアドリブで挿入したのは、カナダ人出演者 5 名のうち 2 名のみであった。

カナダ人のアイデンティティは「カナダ（人）はアメリカ（人）とは違うという意識」の上に成り立っているとよく指摘される（矢頭 2014:49）。アメリカとの対比において「カナダをユニークならしめている特徴は何か」と 10 代のカナダ人に尋ねた調査で、多文化主義、バイリンガリズム、文化的寛容、といった回答と並んで “eh” も挙げられたことは興味深い（Gold & Tremblay 2006:259）。「ことば」に違いを求めるカナダ人は、カナダ英語とアメリカ英語の違いがあまりないため、その少ない違いを強調し[7]、カナダ人のアイデンティティ・マーカーとして取り上げる傾向がある。

では、少ないながら、アメリカ英語との違いが他にもあるなかで、カナダ英語版の撮影現場でなぜ “eh” の挿入のみがカナダ人出演者によって強調されたのか。カナディアン・レイジングや本稿 2 で論じた sorry や after のカナダ音など発音の違いは一般の人々の耳には微妙であり、気づきにくいが、語彙の違いは気づきやすい。語彙のなかでも、“eh” が取り上げられるのは、一つには、本稿 3 でみたカナディアニズムとして挙げられている個別の語よりも、談話標識である “eh” は多くの発話場面で使用されうる、

写真 1.　“eh” をモチーフにした T シャツ

という点が考えられる。また、“eh” は、商業広告や商品（写真 1 参照）だけでなく、新聞の見出し、ウェブサイトの名称など、カナダのメディアでも使われるようになり、今やカナダ人のアイデンティティの象徴の一つとしてカナダ人に広く認識されるようになった、という状況も影響していると考えられる。

7. おわりに

本稿では、カナダ英語会話モジュールに見られるカナダ英語の発音、語彙、綴り字の特徴について解説し、カナダの文化と社会の表れ方についても触れた。カナダ英語に接したことのある日本人大学生の多くが、「カナダ英語は聞きやすい（わかりやすい）」や「カナダ英語が好き」といったカナダ英語に好意的な言語意識を持つ、という調査結果がある[8)]。カナダ英語は日本人英語学習者にとって本当に聞きやすい（わかりやすい）のか、という視点からみれば、日本の英語教育はアメリカ標準英語を事実上の規範とするため、発音の面ではほとんど同じであるカナダ英語は確かに聞きやすいといえる。その反面、カナディアン・レイジング、北米英語に共通する better や water などの /t/ の有声化（本特集の新城稿参照）、イギリスの綴り字、「カナダの二重の基準」など、日本人英語学習者にはわかりづらい面もある。

日本では、TOEIC でアメリカ英語以外の英語変種がリスニング問題の音声として使用され始め、「カナダ英語」に対しても関心が向けられるようになった。これまで蓄積されてきたカナダ英語研究の成果が盛り込まれた KANDA × TUFS 英語モジュールのカナダ英語版が、日本人のカナダ英語、ひいてはカナダの文化と社会の理解に貢献することを切に願う。

注

1） 筆者の社会言語学の授業で sorry と tomorrow のカナダ音とアメリカ音を受講者に聞かせたところ、35 名中 29 名がカナダ音の方が聞きやすい（違和感がない）と答えた。他方で、アメリカ居住経験者は、カナダ音に違和感を覚える、と答えた。

2） カナダの「公共事業・政府サービス省 Public Works and Government Ser-

vices Canada（PWGS）」が「カナダ式の作文・編集ガイド」を発行し、このようにカナダ的な書き方の規範を示している（PWGS, 52, 61）。

3）　2013 年 9 月 27 日、J. K. Chambers と筆者の会話より。

4）　ブリティッシュヒルズは福島県にある神田外語グループの教育施設であるが、イギリスの街並みを本格的に再現しているため、イギリス英語モジュールの背景写真として使用した。

5）　カナダ英語会話モジュールのスクリプトは、トロント大学大学院言語学科の社会言語学専攻の大学院生が作成し、J. K. Chambers（トロント大学教授、本科研海外アドバイザー）が監修した。

6）　1980 年代の初め、カナダ国営放送 CBC のテレビ番組で、「無教養なカナダ人」を演じた McKenzie Brothers と名乗るお笑い芸人のコンビがカナダの文化と社会を風刺したネタを使い、“eh” を連発してブームとなった。

7）　カナダ人を対象とした調査で、回答者の大半がカナダ英語とアメリカ英語の類似性よりも相違を強調し、アメリカ英語に対する否定的な態度を示した、という結果が出ている。「カナダ英語はアメリカ英語と似ているか、違うか」という質問に対し、69% が「少し違う」、11% が「大変違う」、19% が「かなり似ている」と回答し、「大変似ている」と回答した者はいなかった。また、「どの英語変種が nicer に聞こえるか」という質問に対し、58% が「イギリス英語」、41% が「カナダ英語」と回答し、「アメリカ英語」と回答した者はいなかった（Boberg, 2010:34–5）。

8）　神田外語大学で行われた社会科学系の講義の受講者を対象とするアンケート調査では、回答者の 25% がカナダ英語について「とても聞きやすい」、52.7% が「聞きやすい」と回答した。また、調査参加者に、どの英語変種であるかは伏せて、8 つの英語変種を聞かせたところ、カナダ英語が他の英語変種に大差をつけて「最も聞きやすい」という評価を得た（矢頭、2014:40–42）。同大学で実施された他の調査でも「最もお手本にしたい英語はカナダ英語」との回答が多かったという結果が得られた（Galloway, 2008:85）。

参考文献

Barber, Katherine, ed.（1998）. *Oxford Canadian Dictionary*, Cambridge: Cambridge University Press.

Boberg, Charles（2010）. *The English Language in Canada*, Cambridge: Cambridge University Press.

Chambers, J. K.（1998）. “English: Canadian varieties” in John Edwards（ed.）, *Language in Canada*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 252–272.

Chambers, J. K. & Peter Trudgill（2002）. *Dialectology*, Cambridge: Cambridge University Press.

Chambers, J. K. (2004). "'Canadian Dainty': the rise and decline of Briticisms in Canada," in Raymond Hickey (ed.), in *Legacies of Colonial English*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 224–241.

Chambers, J. K. (2014). "Canadian English and Identity" 『カナダ研究年報』 第 34 号、日本カナダ学会、57–65 頁

Galloway, Nicola (2008). A Preliminary Investigation of Japanese Students' Attitudes Towards English and Their English Teachers, *Studies in Linguistics and Language Teaching*, 19, pp. 71–93.

Gold, Elaine & Mireille Tremblay (2006). Eh? and Hein?: Discourse Particles or National Icons? *Canadian Journal of Linguistics*, 51 (2/3), pp. 247–263.

Pratt, T. K. (1993). "The Hobgoblin of Canadian English Spelling" in Sandra Clarke (ed.), *Varieties of English Around the World: Focus on Canada*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, pp. 45–64.

Public Works and Government Services Canada (1997). *The Canadian Style: A guide to Writing and Editing*, Toronto: Dundern Press.

矢頭典枝 (2014)「カナダ英語の特徴に関する一考察――日本人英語学習者の言語意識の視点から――」『カナダ研究年報』第 34 号、日本カナダ学会、37–56 頁